

SHOW HEY シネマルーム

★★★★



Data

監督：大森一樹
出演：織田裕二／渡辺謙／黒木瞳／
邵兵／孫暢敏

👁️👁️ みどころ

舞台は20世紀初頭の“魔都”上海。天下の「ペテン師」伊沢修（織田裕二）は、ひょんなことから革命家集団と結びついた。その狙いは？何と日本陸軍が上海へ運ぶ武器をごっそり頂くとするものだ。さて、伊沢が仕掛けた一世一代のペテンとは・・・。観客も見事に騙されること請け合い。楽しい出来ばえに仕上がっている。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<中国への興味>

織田裕二主演の大型エンターテインメント作品。ここ数年私は、中国に凝っている。というほどでもないが、私は昔から、三国志や秦の始皇帝等のお話、そしてアヘン戦争から満州国建国、日中戦争に至る歴史物語や歴史絵巻が大好きだった。最近それが再度頭をもたげてきている感じた。

近くに迫ってきた私の54歳の誕生日である1月26日には、五味川純平の小説を原作として、1970年～73年にかけて日活で作られた山本薩夫監督の『戦争と人間』3部作を9時間半かけて観る予定だ。

<20世紀初頭の上海が舞台>

『T. R. Y.』の舞台は20世紀初頭の“魔都”上海。清王朝の力は弱まり、中国はどんどん弱体化。そんな中日本も、イギリス、フランス、ドイツ、アメリカ、ロシアなどの「西欧列強に遅れるな！」とばかりに、盛んに中国での利権獲得合戦に参加していた。従って、上海には、西欧の言葉はもちろん、中国語、韓国語、日本語が飛び交い、ウラの世界で暗躍する人物がゴロゴロしていた。伊沢修（織田裕二）もその一人だった。

<主役は天下のペテン師>

伊沢はクールなペテン師だ。いかにも「つくりモノ」の娯楽作品らしい人物設定だが、ペテン師でも、とことんクールで、頭がよくて、大仕事をこなしていけばカッコいいし、それなりに面白いキャラになることがよくわかる。もっとも伊沢は、本当は「クールな奴」ではなく、実は「ホットな奴」だったのではないかと思わせるところがまた面白い。

<革命家集団は何を伊沢に依頼したのか>

こんな伊沢に近づいてきたのは、清朝打倒の夢に燃える革命家集団「中華黎明会」のリーダー関飛虎（邵兵）。西欧列強に対抗できる中国国家をつくるためには、まず清王朝を打倒しなければならないと考える彼らは、革命のために命を捧げることがをいとわない真面目一辺倒の連中。伊沢は、本来は、こんな頭の硬い連中は嫌いだ。

だから、「俺は所詮、三流のペテン師なんだ。革命とか国を動かすとか、俺には荷が重すぎる」と言って取り合わない。革命への協力なんてことは真っ平ごめん、ということだ。しかし伊沢は、伊沢のペテンにかかり、怒り狂った武器商人から差し向けられた刺客に執拗に命を狙われていた。そこで関は、「協力するかわりにお前の命を守ってやる」という条件を持ち出してきた。

伊沢はしぶしぶ承諾。伊沢の任務は、何と日本陸軍が上海に運びこむ武器を伊沢のペテンでそっくりいただく、という途方もないものだった。伊沢と対峙するのは、日本陸軍のエリート中のエリートである東正信中将（渡辺謙）だ。

<伊沢のど肝をぬくペテンの数々>

さあ伊沢はどのように東中将をペテンにかけるのか？このペテンのストーリーは実に面白い。二転、三転、四転、五転する。

ポイントその1は、伊沢の仲間。気心知れた中国人、韓国人の仲間が不可欠だ。

ポイントその2は、時代背景。当時日本に留学し、陸軍士官学校に入学していた清王朝の皇族載寧が登場する。これらの歴史的事実をおさえておくことは不可欠だ。

ポイントその3は、言葉。伊沢はドイツに留学していた東中将に対して、東の恩師から手紙を預かっていると真っ赤なウソをついた。そして、東からドイツ語で話しかけると、平然とドイツ語で回答した。何ともカッコいい。

最大のポイントは、ペテンの仕掛けの巧妙さ。観客はみんな伊沢のペテンに騙され続けること請け合い。実に見ごたえのあるペテンの連続だ。

<おすすめ作品です>

製作費11億円ということだから、日本映画としては結構金をかけた大作。人気も上々

らしい。私が映画館に入ったときもほぼ満席だった。

織田裕二はこの伊沢役を好演。すごく好感の持てる演技だ。一方、東中將を演ずる渡辺謙もいい。黒木瞳はチョイ役だが、この映画ではそれくらいの役でちょうどいいだろう。

織田裕二が歌う『We can be Heroes』も、ヒットチャートでベストテンには入らないだろうが、軽快なテンポで覚えやすい、いい曲だ。(ラップもあるし、途中ハンゲル語と中国語も入るよ！)

とにかく十分楽しむことができる日本映画であることはまちがいない。拍手。拍手。

2003 (平成15) 年1月20日記